

# 観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

令和三年八月七日(土曜日) 午後五時開演

## 狂言 咲嘩(さっか)

主人は連歌の初心講の頭屋に当たり、都の伯父に宗匠を頼むため、太郎冠者を都に行かせます。都見物気分の太郎冠者は伯父が都のどこに住み、どういう人であるかを聞かずに出ました。太郎冠者らしい才覚で、「伯父御様はござらぬか」と連呼して、名乗り出た男を疑わずに連れ帰ります。主人が物陰から男の顔を見ると、大盗人の見乞い(見たものを奪う意)の咲嘩でありました。事を荒立てず、適当にあしらって返そうとする主人の迷惑を、太郎冠者のまことに愚鈍な言動が悉く消し飛ばしますが、その並外れた不調法ゆえに、さしもの咲嘩も翻弄されて、打たれ、こかさされ、思わぬ天罰が下ります。

## 能 西王母(せいおうぼ)

官人(アイ)が出て聖代を称え、今日はこの御殿に行幸があるから参内されよと触れた後、過去に例を見ない聖徳の帝王(ワキ)が臨幸し、光り輝く御殿には大臣(ワキツレ)はじめ百官卿相が列座、四方の門には千戸・万戸の諸侯が群集しています。そこへ侍女(ツレ)を伴った天女(前シテ)が訪れ、三千年に一度花が咲き、実の成る桃を、その時機を得た聖主に献上したいと申し出ます。帝王がそれは伝え聞く西王母の園の桃かと確かめると、天女は帝王の恵みが行き渡ることを感じて桃の花が咲き、天女が天下るのであると答えます。天女は天上の楽しみの中で年を経る西王母の分身であると名乗り、後刻桃の実を持って真の姿を現すことを予告して昇天します(中入)。帝王と大臣たちが音楽を奏して待つうちに、孔雀・鳳凰・迦陵頻伽など、数々瑞鳥が飛び廻るなか、紅錦の衣をまとい、剣を腰に提げ、晨纓の冠を戴いた、真の姿の西王母(後シテ)が降臨します。西王母は侍女に持たせた玉盤から桃の実を受け取り、帝王に捧げます。花を浮かべた盃を手に酒宴もたけなわ、袖も裳裾も翻して美しい舞を披露した西王母は、花や鳥と共に春風に乗り、空のかなたに翔り去ります。(西村 聡)

前シテ(西王母) 面(増又は小面又は泣増) 鬘 鬘帯 箔 唐織  
後シテ(前シテ同) 面(泣増又は小面) 黒垂 天冠 箔 色大口 腰帯 長絹 扇

(六時半頃終了予定)